

オーストラリアにおけるライフセービング文化の実態調査

文学部人文社会学科 社会情報学専攻 3年

早川 斗真

目次

1.活動目的.....	1
2.計画実行までの流れ.....	2
3.活動日記.....	3
4. 日本とオーストラリアの違い.....	4
4-1 パトロール	
4-2 トレーニング	
4-3 ライフセービング文化	
5. まとめ.....	6

■採用コース: 文学部学外活動応援奨学金 Cコース (300,000円)

■実施計画内容: 「オーストラリアにおけるライフセービング文化の実態調査」

■実施調査目的地: オーストラリア ニューサウスウェールズ州 フレッシュウォータービーチ

■調査期間: 2020年1月29日(水) ~ 2020年3月19日(木)

本稿では約二か月間の活動内容の紹介と調査結果をもとに、オーストラリアのライフセービング文化の実態について明らかにする。

1. 活動目的

今回、私はオーストラリアのニューサウスウェールズ州にあるフレッシュウォータービーチにて約二か月間、パトロール活動とトレーニングに参加させていただいた。この活動の目的は主に二つある。一つ目は、ライフセービング発祥の地であるオーストラリアでの練習やトレーニング、パトロール技術を日本に持ち帰ることで、さらなる日本のライフセービング活動の競技スポーツとしての発展とパトロール力の向上が見込まれることである。レスキューアとしての技術、海の監視の仕方など、オーストラリアで学ぶことで、新しい予防策を増やしていきたい。二つ目は海に囲まれた島国であり、たくさんの海水浴場があるにも関わらず、日本ではライフセービング活動についての認知度は高くない。だからこそ、「文化としてのライフセービング」の理解と普及を目指して、この活動に取り組んでいきたい。そもそもライフセービング活動とは、誰にでもできる活動なのだ。オーストラリアでは実際にライフセービング活動が文化として根付いている。そこで、オーストラリアでの本活動を通じて、「文化としてのライフセービング」を理解し、身につけ、日本の活動においてほかの人にも伝えることで、我々ライフセーバーが目指している「水辺の事故を無くす」という理念に近づけられると考えられる。

2. 計画実行までの流れ

・日本にいる間の準備

私はこのプログラムを実行するために、まずオーストラリアのライフセービングクラブに連絡を取らなければならなかった。練習機材を貸してもらえるのか、パトロールに参加することはできるのか、練習参加できるのか等、自分の計画を伝えなければならない。

そこでの連絡手段として多くのライフセーバーは日本に所属しているライフセービングクラブと姉妹提携を結んでいるオーストラリアのクラブにお願いすることがほとんどだ。しかし、私がいま日本で所属しているクラブにはオーストラリアとのつながりがないため、一から自分で活動できるクラブを見つけ出さなければならない。そこで、私が行った内容は以下の手順である。

1. Google Maps でオーストラリアの位置まで移動してから、Surf Life Saving Club を検索
2. たくさんのクラブが出てくるので、クラブの基本情報を入手し、ひたすら Gmail で自分

の作った英文を送信。

実際におくった Gmail がこちらである。

Meeting request

Hello. My name is Toma Hayakawa.

I am an university student in Japan and belonging to a lifesaving club in Japan.

I sent you this email because of my plan to learn a lifesaving culture in Australia.

I am planning to go to Australia in February.

During my stay in Australia, I want to join your activities.

Would it be possible to join your activities?

Australia is the place where lifesaving started, so I also would like to participate in training of lifeguards.

One of my goals of lifesaving activity is to become a champion of board race in Japan.

It is clear that the way to the champion is really tough, but I am confident about doing my best.

I hope I can also practice with you.

Due to the deadline of my application with my university, could I ask you to respond to this email by November 10th?

I look forward to your reply.

Best regards,

この英文を約 20 クラブに送信した。これぞといった実績も残していない、何も知らない日本人大学生を引き受けてくれるところなど、簡単に見つかるはずがない。返信が返ってきたクラブは二クラブだけである。丁寧に断りの連絡がきたクラブと有り難いことに承諾していただいたクラブである。このような形でフレッシュウォーターライフセービングクラブにお世話になることが決まった。

このあとは具体的にどのようなことをしたいのか詳細について連絡した。クラブの真摯な対応のおかげでスムーズに準備をすることができた。この後に行った準備は、入国するため

のビザやパスポートの取得、ホームステイ先の決定、飛行機の手配など基本事項のみである。

3. 活動日記（一週間ごとに載せる）

第一週「生活に慣れる」

1月29日（水）	羽田空港出発
1月30日（木）	シドニー空港到着、ホームステイ先へ
1月31日（金）	オフ
2月1日（土）	トレーニングテスト、面談
2月2日（日）	レースイベント
2月3日（月）	練習開始
2月4日（火）	練習

第一週目は生活に慣れることを第一に考えて行動した。ホストファミリーに出会い、beachへの行き方をわざわざ車で乗せて教えてくれた。乗り換えする位置など細かく教えてくれた。ホームステイ先でのルールを聞き、自分がこの生活で何をするのか話した。31日はまだ到着して早々なので、近くに何があるのかを探すのを含めて観光した。

そして迎えた二月からの海での日々。まず Freshwater SLSC¹のスポーツディレクター、Kevin Crowに挨拶をした。彼に、トレーニングと一緒に参加するには泳力をチェックする必要があるといわれ、50メートルのタイムを計測しにプールへ行った。結果、問題なしと認められて一緒に練習することの許可が下りた。練習後、ケビンから今後の予定を立てていこうと話し合うことになり、カフェに行った。このクラブでの練習やパトロール活動についての説明を受けた。

- ・月曜日から金曜日の18時から19時15分 スイム&ボード
- ・土曜日7時から9時 スイム&ボード
- ・日曜日11時からサーフレース&ボードレース
- ・土曜&日曜 パトロール活動

ライフセービングの競技スポーツでボードレースという種目がある。実際のパトロールでは黄色いレスキューボードを使うが右の図（ボード）は競技用だ。パトロール中では、遊泳客の浮力になる非常に大切な器材。一早く溺れている人に駆け付けられるように日々ライフセーバーはトレーニングに励んでいる。



¹ フレッシュウォーターライフセービングクラブのこと

ケビンから練習時間とパトロールの日を聞いた。パトロールに参加したり、Freshwater での活動の中で、協力できることがあれば何でもやりたいことを伝え、ケビンからもできる限りのサポートをすると約束してもらった。Freshwater メンバーに渡される鍵を頂き、ボードはいつでも使っていいと許可をもらった。まずは始まったばかりなので、何かあれば適宜話し合いをすることになった。また、平日の練習終了時間とホストファミリーの夕食の時間が車で乗らないと間に合わない時間のため、毎日ケビンかクラブのメンバーに送っていただくことになった。第一週目は生活に慣れることを第一に考え、49 日間自分がやりたい生活ができるように環境を整えていく日々だった。

第二週「練習になれる・チームに馴染む」

2月5日（水）練習
2月6日（木）練習
2月7日（金）台風並みの豪雨&強風 練習中止
2月8日（土）Big Wave トレーニング ²
2月9日（日）台風並みの豪雨&強風 練習中止
2月10日（月）練習
2月11日（火）練習

第一週に続いて、生活に慣れることはもちろん、ハードなトレーニングに慣れるようにメニューをしっかりと理解するまで聞いて、チームメイトとのコミュニケーションを積極的にとった。第二週は悪天候で、ビーチクローズ³の日が続いた。今まで体験したことの無い大きな爆波の中、海にみんなで飛びこんで、オーストラリアのレベルの高さを目の当たりにした。一日の具体的な過ごし方や練習内容についてはトレーニングの項目に記載する。少しずつではあるが、確実に練習には慣れてきた。また中央大学ライフセービング部のメンバーが観光しにオーストラリアに来ていて、練習中止の日に会い、リフレッシュもできた。

² 大きな波を乗るトレーニング。3メートル以上ある。

³ 遊泳禁止。赤色の旗が立てられ、遊泳客が海に入ること禁止される。

中大メンバーとの休日（写真右からフェリー、ロイヤル植物園、LUNA PARK）



第三週「よりハードな毎日」

2月12日（水）練習
2月13日（木）練習
2月14日（金）練習
2月15日（土）練習&第二回面談
2月16日（日）練習&パトロール
2月17日（月）練習
2月18日（火）練習

第三週目は上記の日程を見ればわかるように、非常にタイトではあるが、残りの生活のペースが完成されてきた。土曜日に二回目となる話し合いをケビンと行った。スイミングクラブで練習したいという内容である。毎日ビーチの奥にくっついているオーシャンプールで泳いでいたが、決してきれいではないのと、競泳大国オーストラリアでの練習に参加してみたかったからである。クラブチームのほとんどが水泳クラブにも所属していた。ライフセーバーとして一レスキューアとして泳力は非常に大切になってくる。だからこそ提案、相談を持ち掛けてみた。チームメイトの中に水泳コーチをしている人がいて、いろいろクラブ探しに尽力してくれたのだが、4週間という短期で、選手コースを許してくれるところはなかった。しかし、水泳クラブではなく、趣味としてマスターズで水泳を楽しんでいるおじさんたちの練習にお邪魔させてもらうことは可能だと提案してもらった。そのメンバーの中には、かつてニューサウスウェールズ州で一番速かった選手や元オリンピックスイマーなど、クラブの選手コースより速い人がいる、そんな集団である。週三回自主的に皆でメニューを組みながら練習していることから、紹介していただき、参加することが可能となった。またオーストラリアに来て、念願のパトロールに参加させてもらった。詳しくはパトロールの項目で書き記すが、貴重な体験、ここで学びたかったこと、やりたかったことがどんどん実現する、そんな一週間となった。

第四週「安定へ」

2月19日（水）練習（大量に海の水を飲み溺れかける）
2月20日（木）練習

2月21日（金）練習
2月22日（土）練習
2月23日（日）練習&パトロール
2月24日（月）練習
2月25日（火）練習

第四週は一ヶ月が経過したということで、生活面や練習面でだいぶ慣れてきたように感じた。しかしながら練習自体のキツさは変わらないので毎日死に物狂いで頑張っていた。技術面で、最初の頃より明らかに成長したことが感じられたり、フォームがきれいになったとコーチに褒められたりして嬉しかった。二回目のパトロールも体験することが来て、前回よりも広い視野で、より主体的に動ける時間になった。自分なりのリズムを掴み、チームメイトとも親しくなってきた、ますます楽しくなってきた。

第五週「継続&追い込み週間」

2月26日（水）練習
2月27日（木）練習
2月28日（金）練習
2月29日（土）練習&パトロール
3月1日（日）イベント手伝い&パトロール
3月2日（月）練習
3月3日（火）ベネット⁴工場見学&練習

第五週となり、いよいよ折り返し地点となった。三回目となるパトロールで、日本人のクラブメンバーに出会った。両親の仕事上オーストラリアに住んでいて、このクラブにも所属して、パトロールにも参加していた。英語で聞けないような、細かい内容を聞き、有意義な時間を過ごすことができた。また日曜日には海で約2キロメートル泳ぐ大会があり、選手の安全を確保するために海上で監視する仕事をした。日本でベネットボードを販売している方と知り合いのためベネット工場にも行った。来週末にニューサウスウェールズ州の大会観戦に行くため練習三日間できないから、今週はいつも以上に追い込む意識で練習した。

⁴ サーフブランドショップ



高校生の森優太君（写真右）



第六週「見て学ぶ」

3月4日（水）練習

- 3月5日（木）オフ
- 3月6日（金）大会観戦
- 3月7日（土）大会観戦
- 3月8日（日）大会観戦
- 3月9日（月）練習
- 3月10日（火）練習

待ちに待ったニューサウスウェールズ州の大会。約70クラブが参加している。生でオーストラリアの選手を見ることができるのは最高の経験だ。ひたすら動画を撮り、自分と照らし合わせてみていた。大会期間は宿にチーム皆で泊まり、夜ご飯はみんなでパーティーをして楽しかった。試合になると顔色変わる仲間たち、本当にかっこよかった。裏方として、テント運びや荷物係など、チームのために協力することができとてもよかった。



↑夕食のパーティーでみんなと集合写真

第七週「最後は全力で楽しもう」

- | | |
|----------|------------------|
| 3月11日（水） | タロンガ動物園&練習 |
| 3月12日（木） | 練習 |
| 3月13日（金） | ボンダイビーチ&練習 |
| 3月14日（土） | 練習&BBQ&お疲れさまでした会 |
| 3月15日（日） | 練習 |
| 3月16日（月） | 練習 |
| 3月17日（火） | ラストトレーニング |
| 3月18日（水） | シドニー空港出発 |
| 3月19日（木） | 羽田空港到着 |

第七週ということで、オーストラリア生活最後の週だ。ケビンが普段勤めているタロンガ動物園のチケットをくれて、スペシャルツアーをしてくれた。またずっといきたかったボンダイビーチにも行くことができた。土曜日のBBQでは、サプライズで Freshwater クラブのウィンドブレーカーをプレゼントしてくれて、みんなの前で感謝を述べる機会を頂いた。本

当に心温かいクラブで、「こんなにも自分におもてなしをしてくれるとは」と思うと胸が熱くなり、喋っている途中で感極まってしまった。本当に最高のクラブに出会えたことに感謝しかない。夜の打ち上げではチームメイトの家で、一晩中みんなで騒いでいた。最高の仲間と過ごす時間はかけがえのない思い出となった。また最後の練習では今まで乗ったことのない一番大きな波に乗ることができた。このメンバーと一緒に練習できて本当に良かった。集大成を見せることができたのではないかと思う。



以上のここまで記した七週間が私のオーストラリアで過ごした日記である。

4. 日本とオーストラリアの違い

4-1 パトロール

実際に体験してみて感じた違いは以下の通りである。

- ・レスキュー器材が豊富
- ・パトロールの人員が確保されている
- ・遊泳エリアが狭い

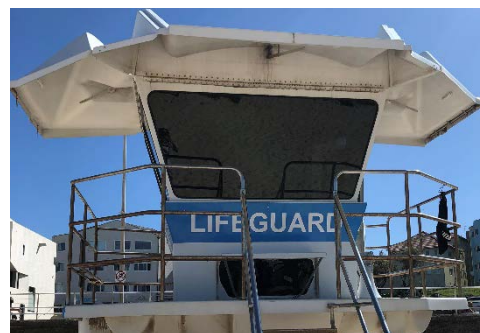


・お客さんとの距離感

具体的に説明していくと、レスキュー器材というのはパトロールで使う道具のことである。砂浜を歩き回るのは非常に疲れる。バギーという車に乗って、荷物を運び、砂浜を移動した。日本の海水浴場でバギーを使用しているところもあるが、決して多くはない。パトロールメンバーの負担削減にもつながり、いいと思った。また監視する部屋にUVカットされたガラスになっていて、サングラスのような窓になっているのも驚いた。またほとんどの海水浴場で危険な波についての看板やクラゲに注意、ビーチの禁止事項看板など、細かいところでの器材も豊富だった。パトロールの人員については日本との決定的な違いがある。ライフセービングクラブのメンバーだけでパトロールを行う日本に対し、ライフガードという職業としてパトロールを行うものがオーストラリアにはいるのだ。そして、平日はライフガードのみでパトロールし、土日のみボランティアでクラブメンバーもパトロールする。人数が多すぎるためパトロールに参加したくてもあまり入れないらしい。平均として三週間に一回くらいのペースで参加できる。また午前のメンバーと午後のメンバーで9時から13時、13時から17時と総取り換えする。集中力の維持や疲労を考慮すると、いい策だと思う。日本では、多くのクラブが連日のようにフルタイム監視活動をしている。人員を確保できていないからだ。疲労困憊の中毎日学生中心に監視活動を行うのは厳しい。オーストラリアのように地域メンバーとの協力が鍵になると思う。また遊泳エリアも日本に比べると狭い。波が非常に高く、危険なリップカレントができやすいからである。また、サーフィンスペースなども確保しなくてはならないので、狭く感じた。遊泳客とライフセーバーの距離感を近く感じた。フレンドリーに楽しくパトロールしていた。自由が多く、パトロール中に買い物に行ったりしてるメンバーもいて驚いた。パトロールに対する心持ちなど、余裕も感じた。

4-2 トレーニング

トレーニングの違いについては、日本と違い毎日練習があることだ。日本だと海に近くない限り、毎日海に通って練習することは難しい。だからこそやる人はやるし、やらない人との差がつき、トップを目指しやすい環境になっている。オーストラリアはクラブの公式練習がしっかり体系化されて行われている。コーチが三人くらいいて、メニューを毎度毎度伝え、アドバイスをしてくれる。日本は多くの場合、選手がメニューを決めてその場で練習することが多い。練習することに集中できてとても良かった。また、曜日や週によって練習内容がプ



ログラム化されているので、今後の練習の参考になった。

また、プール競技もライフセービングの大会にはあるが、プール種目の練習はクラブでは行われていなかった。練習時間の2時間くらい前から、メンバーたちが集まり、おしゃべりしてから練習が始まる。イメージとしては高校の部活動だった。

私の日記の中で練習と大きくひとくくりが終わらせていた一日を具体的に紹介する。

曜日によって分けていた。第三週目くらいから落ち着き始めたので、第三週目以降の一日を説明する。

月、水、金

(下写真) マンリーアクアティックセンター

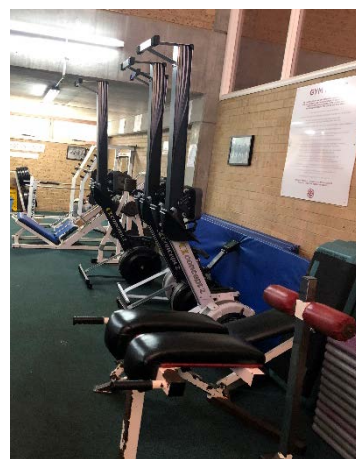
7時起床
8時出発
9時～11時プール練
12時～13時ボード練(自主練)
13時昼食
14時～16時30分筋トレ&ストレッチ
18時～19時ボード練
19時30分夕食
22時就寝



火、木

クラブトレーニングルーム(右写真)

7時起床
8時出発
9時～11時ボード練(自主練)
11時30分～13時ランニング
13時昼食
14時～以降 月、水、金と同じ



土日

5時起床
6時～7時プール練
8時～9時ボード練
9時～13時パトロール
13時昼食
13時以降～筋トレ、ランニング、オフなど

このように自分なりにストイックな毎日を過ごした。施設が非常に充実していて、クラブ内にジムがあり、近くにプールもある。マスターズの方との練習は今までで体験した練習で一番きつかった。誰かしら練習している人はいて、向こうの方たちが声をかけてくれるので、ジムでの筋肉トレーニングなども仲間たちと行うことができた。

4-3 文化

文化の違いについて感じた一番のことは、マリンスポーツはオーストラリアでは大人気ということである。まずはサーフィンだ。波が非常に高いところが多いので、サーフィンをする環境が多い。日本だと、湘南や九十九里や下田など、有名なサーフィンスポットはあるが決して多くはない。



また波がないところではシュノーケリングスポットがある。海全体的に水質がきれいで気持ちよかった。海で泳ぐ人たちが非常に多く、若者に限らず老若男女海でも泳ぐのが印象的だった。私がパトロールした海で泳ぐ大会でも、20歳までのカテゴリーなど、30歳以上のカテゴリーなど、普段コーチをしている50歳のコーチも大会に参加していた。身近に海で遊ぶ感覚があるのだと感じた。また海で遊ぶというのは浜辺、つまりビーチでも遊ぶ。毎週末プロ選手のようなビーチバレーの試合が行われていた。ビーチサッカーをしている人たちがたくさんいた。このように、マリンスポーツや海に行き遊ぶ習慣が決定的に多い、身近であると感じた。

また子供たちが海に触れあう場として、ライフセービングクラブによるジュニア活動が毎週日曜日に行われていた。毎週日曜日はイベントの日となっていて、親子で活動に参加して、海で遊ぶ企画が行われていた。ビーチフラッグスや砂浜徒競争、膝の高さまで海に入って水の中を走ったり、波乗り体験などをしていった。そして驚いたことは、子供たちの安全係やイベントの進行係が子供たちの親であり、多くのクラブの親が朝から準備に取り組み、ライフセービングの資格などを持っているため活躍していた。率先して親が引っ張っている姿に感動した。自分たちの子供は必ず親が守るというような考えがしっかりあり、特に海やプールなど水辺の場所では溺れる危険もあるため、強く看板などに書かれていた。海辺の危険と楽しさをみんなが共有



しているからこそこのような活動や文化が形成されているのだと感じた。

日本とオーストラリアでのライフセービングクラブの違いの中に、地域との密着の差は確実にある。日本の社会問題というか、首都と地方との人口の差など、地域の活性化がこのライフセービングを通じて、オーストラリアは全体的に活性していると感じた。海に必ず大きなライフセーバーがとどまるためのクラブハウスがあるという点で、その差は歴然だろう。クラブハウスがみんなが集まる場所となっていて、クラブの顔となる場所だ。日本は地震とか災害の多い国でもあり、難しい問題なのかもしれないが、オーストラリアでライフセービング活動が盛んなのには、一つ一つのクラブに海の近くに事務所の役割を果たしたクラブハウスが存在するからだと思う。だからこそ、私が応援に行った大会の参加チームも州大会にもかかわらず、70クラブの参加に2000人以上が参加する大きなものになる。日本の一番大きな全日本選手権で63チーム、約1300人の参加から規模による差は明らかだろう。オーストラリアで一番大きな大会は6000人以上の参加者で4日間かけて大会運営を行う。地域とクラブのつながりが国民全体にまで広がっている。だからこそ文化として根付いているのだろう。

5. 感想

オーストラリアにおけるライフセービング文化の実態調査ということで、7週間過ごした。文化として成り立つには、歴史もある。日本にはない環境の中、実際にパトロール活動やトレーニングに参加させていただいた。一日一日の生活すべて自分で決めて行動しなくてはいけなく、大変ではあったからこそ、行動に責任を持って、取り組むことができた。英語が決して得意ではなく、フレッシュウォーターのクラブメンバーにはたくさんの迷惑をかけた。それでも優しく接していただき、チームメイトの一人として歓迎してくれたことは感謝してもしきれない。ホームステイ先のファミリーやメンバーにもたくさんの理解と支えを頂いた。初めての海外経験で、いろいろな挑戦であったが、最後までやりきることができ本当にほっとしている。今回の実施にあたり、中央大学ライフセービング部のメンバー、また南伊豆ライフセービングクラブのメンバー、学外活動応援奨学金に選出されるためにご協力いただいた松田教授をはじめ、多くの方々、本当に感謝申し上げます。この経験を生かして、ライフセーバーとして「水辺の事故を無くす」ためにできることをこれからも考えて実践していきたい。



パーティー写真



プレゼントされたウィンドブレーカー



フレッシュウォータークラブテント



パトロールメンバーで一枚



クラブ勲章



クラブ理念

